

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2025年5月 NO.239



[もくじ]

- 2～3 私と文化芸術…桑名龍吾
- 4～5 第34回高知出版学術賞を審査して…ヨース ジョエル
- 6～7 能楽との出会い…金 奎道
- 8～9 私も鳥の言葉がわかりたい…山中由貴
 - 10 「タウンモビリティステーションふくねこ」開所十周年を迎えて…笹岡和泉
 - 11 「アンテナ」「劇団どくんご」とバイクツーリング…下尾 仁
- 12～13 高知市文化振興事業団3月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

私と文化芸術

桑名 龍吾

【私と文化芸術】

市長に就任して以来、様々な文化活動の視察や文化団体の皆さんとの交流を行ってきました。知らなかった文化に触れたり、体験することで高知の魅力を再発見しているところです。

さて、私と文化ですが、これまで文化や芸術とは程遠い生活をしてきました。子どもの時から、習字では半紙から字がはみでたり、また椅子をつくる授業では、足の長さがちぐはぐで最後は風呂用の椅子になったりと。そして、ピアノとエレクトーンの講師であった妻と結婚。あまりに興味が違うし、まあ笑いの連続でした。しかし、歳を重ねるにつれ、私も音楽

や茶道などを通じて動から静へと、趣がわかるようになったと感じています。この一年は、高知市文化振興事業団主催の大阪交響楽団をかるぽーとで、NHK交響楽団を県民文化ホールで夫婦一緒に楽しみました。

【市展に出展】

そんな私に大きな試練がやってきました。高知市展の皆さんとの懇親会の席上、「歴代市長は毎年作品を出しているの、桑名市長もぜひ。各分野先生はいますから」と。その場は、「え、え」と力なく返事を返したものです。さあ、家に帰って習字の練習を。やっぱり何度書いても様になりません。

それを見ていた家族も字を見て大笑い。そこで思いついたのが写真です。SNSの投稿などでスマホを使って写真を撮っており、構図にも少しは自信があったし。とは言っても本格的なカメラもなく…。そこで指導を仰いだのが市の広報担当、写真が趣味のM女史です。撮影場所は私が大好きな高知城。お借りしたカメラは一眼レフで、手取り足取りご指導をいただきました。構図や明暗のあんばいなど、スマホで気軽に撮るのは違った緊張感がありました。やっぱり難しい。でも、渾身の一枚が出来上がりましたよ。タイトルは「150年の時を経て―板垣退助の夢―」。この状況を

本市の広報紙、あかるいまち市長コラムに書いたなら、さっそく板垣退助を顕彰する「板垣会」の冊子の表紙で使いたいとの依頼をいただきました。今は市役所特別応接室に飾っています。

【芸術と武道】

私の趣味は剣道です。居合も以前やっておりました。今でも時間をみつけては稽古に励んでいます。その中で、芸術と武道の共通の教えがあります。それは、修業における段階を示すもので、「守破離」という言葉です。「守」は、師匠や流派の教えを忠実に守り確実に身につける段階。「破」は、他の師匠や他の流派についても学び、良いものを取り入れて既存の型を破る段階。「離」は、形にとらわれず、師匠のもとを離れ新たな境地に至るというものです。千利休は、「規矩作法 守り尽くして破る」とも離るるとても本を忘るな」と和歌を詠んでいます。茶道や華道、そして皆さんの作品には、そ

れぞれの境地を感じながら接しているところですよ。

「芸の道」も「武の道」も目指すところは人間形成です。果てしなく続く修業の道を師弟同行で歩んでもらいたいです。

【機構改革】

令和七年度から文化・観光・スポーツの各部署を統合した「文化観光スポーツ部」を設置すること



「150年の時を経て～板垣退助の夢～」(第76回高知市展 出展)

としました。「スポーツツーリズム」という言葉と同様に、文化についても、有形、無形の文化資源の観覧、文化資源を活用した体験などを通じて、文化についての理解を深めるための「文化観光」という言葉があります。国では令和二年に文化観光推進法を施行、また文化推進事業補助金を創設しており、文化と観光振興、スポーツと観光振興を同一の部局の中で推進することは、国の施策からも自然な流れであり、施設の維持管理や歴史文化財の研究・保存などに必要となる財源確保の観点からも観光へ利活用していくことが重要であると考えます。

高知には、誇れる文化や芸術があります。これらの魅力を大いに発信していかなければなりません。台湾からのチャーター便も搭乗率は九十%を超えていますし、大型客船の高知新港への寄港も令和七年四月時点で今年度は百隻(令和六年度五十三隻)とインバウンドも好調です。この機に乗じて海外

からの皆さんにもかるぼーとお越しいただき、市展などの展覧会や茶道、華道などの体験もしていただけるような仕組みも作っていかねればと考えています。今回の機構改革で高知の文化や芸術をさらに発展させてまいります。

【よさこい高知文化祭2026】

令和八年十月から国民文化祭「よさこい高知文化祭」が天皇皇后両陛下をお迎えし、高知県を舞台に開催されます。高知市では、十七の交流事業、十五の地域文化発信事業が開催されます(令和七年四月一日現在)。昨年岐阜県で開催された「清流の国ぎふ文化祭2024」では、のべ二百六十万人が参加しました。閉会にあたり岐阜県の古田知事が「文化祭は本日で閉会するが文化が持つ、つながりや広がり、力に改めて思いをいたし、新たな時をともに刻んでいきたい」とご挨拶されました。高知市においても多くの方々を訪れ文化や芸術の交流がおこなわれ

ます。まさに平和の有難みを感じ、豊かさを実感できるひと時になることでしょう。四月からは文化観光スポーツ部文化振興課内に「よさこい高知文化祭推進室」を設置し、大会開催に向け動き始めました。これを契機として、皆さんと一緒に高知の文化芸術をつくり・守り・発信してまいります。

くわな りゅうご



一九六二年 高知市生まれ
國學院大學卒業
JA全農高知(現JA高知県)、
国会議員秘書、高知県議会議員を
経て、二〇二三年十一月より高知
市長になる。
趣味は、剣道教士七段、土佐直伝
英信流居合三段、杖道初段。

高知出版学術賞を審査して

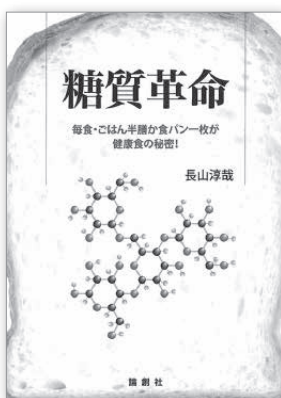
ヨース ジョエル

本年の応募作品の「収穫」は十一冊で、平年並みであったが、例年に比べて、多種多様のテーマと形式の図書が推薦された。もちろん、今年の出版学術賞はいつも通り、学術面で大変しつかりとした図書が受賞しているが、本賞は専門性の高い学術書のみに絞られているのではない、という認識が高知県内外で広く共有されているように、実に喜ばしい傾向である。

今年の特別賞受賞作も、リレーエッセイという形をとりながらも、その主旨は学術への門戸を開くことにあり、一般読者と「知」の世界を結びつける工夫がなされている。同時に、三冊は共通して、ものごとを「頭」だけでとらえないで、学知の社会的インパクトを強く意識した知見を提示している。

■高知出版学術賞

長山淳哉 著

『糖質革命 毎食・ごはん半膳か食パン一枚が健康食の秘密!』
(論創社 刊)

「糖質革命」というタイトルは、著者の意気込みを感じさせて興味を引くのはよいが、反面、真面目な読者に「もしかして、トンデモ本ではないか」という印象を与えてしまう。否定しがたい観察であるけれども、読んでみればそうでもないことが分かる。

著者は、標準体重、BMI値二二で糖尿病になった自らの経験をふまえて、現代における日本人の糖質摂取の過剰を指摘し、学会の指針が緩すぎることに対して警鐘を鳴らす。多くの人が知らず知らずのうちに糖尿病になるのを防ぐのには、糖質（炭水化物）エネルギー比率を五〇―六〇%から三〇%まで減らして体重を減少する必要がある、と呼び掛ける。強気の主張をするが、読者の不安につけこむ断言を並べ立てるといふスタイルに陥ることはない。

長山氏は、長年九州大学医学部で公衆衛生学を教えていた。定年退職した後、故郷の高知に戻り、執筆活動に専念している。日本糖尿病学会のガイドラインに異を唱えるが、反対意見の紹介、その反証に紙幅を割くなど、けっして独

りよがりにならないところが評価のポイントの一つである。巷にあふれる根拠に乏しい糖質制限とは違い、最新の栄養学の知見に基づく食事を、多くの論文や検証データをもとに深く解説している。糖尿病患者が多い高知県。本県の医師や看護師、管理栄養士たちをはじめ、健康促進のため一般市民にも有益な図書であると考え、賞を授けた。

■高知出版学術賞

飯國芳明・上神貴佳 編

『人口縮減・移動社会の地方自治
人はうごく、町をひろく』
(有斐閣 刊)

本書は、高知県大豊町をフィールドとして、農村社会学、農業経済学、政治学そして行政学の研究者が取り組んだ地方政治にかかる

共同研究の成果である。学際的アプローチによって同地の集落自治と住民自治のありようを立体的に把握し人口縮減社会において地方自治をどう構想するか、その議論の手掛かりとなる見解を提示しようとするのが主旨である。問題提起と解決策の模索という目的はおおむね果たせたといえる。公文書から市民の陳情書のテキスト分析やインタビュースタディまで、様々な手法によって、大豊町の過去と現在における住民自治の状況を描き出している。また、大豊町という高知県の一つの町から大きく視野を広げて、人口が減少していく日本社会に対する数々の展望・警句・提案もなされている。つまり、環境問題、都市問題、人間の生き方に広がる論点と観点は高知の一地域を対象としたケーススタディの枠を大きく超える可能性を示している。

■特別賞

青木真兵・光嶋裕介・白岩英樹 著

『ぼくらの「アメリカ論」』

(夕書房 刊)



新しい住民自治の可能性の芽としての移住者に関する検討、あるいは、二重の住民登録を真剣な考慮の対象とするなど、今後に向けた指針を一般読者にも分かりやすい形で示そうとする工夫を特に評価したい。課題先進県である高知の市民の教養に資するだけでなく、全国の地域政策にも有益な書であるとして、出版学術賞を授けた次第である。

世界的情勢は分断が進み、いっになく混沌としているように見える。とりわけアメリカという国の様々な動きをどのようにとらえてよいか分からない状況に不安を抱える人が多いだろう。いうまでもないが、ネクタイの長い大統領が仲間と思われていた国々をも窮地に立たせるような政策をつぎつぎと打ち出す昨今、巨大勢力アメリカの行方はますます読めない。世

界的にみて、相手をねじ伏せる強国ぶりを顕示する一方、相変わず多くの移民を惹きつけるだけの力を持ち合わせているアメリカの本質をどう考えたらよいか。

本書は、アメリカの情勢に危機感を抱いた青木真兵の呼びかけに応じて二〇二三年にはじめられた、三名の著者によるWEB連載のリレーエッセイの書籍化である。三名の著者それぞれが自らの中の「アメリカ」を問い直し、それぞれの専門（思想史、建築、アメリカ文学）の立場から、かつての、そして今の「アメリカ」のイメージを掘り下げていく。高度な知識を持つ三人による、いわば遠距離の鼎談であり、エッセイという踏み石を用意して一般読者を対岸にある学術の地へといざなう、というような挑戦でもある。アクセントもスタイルもかなり違う文章が並ぶのだが、審査委員たちは、対話を通じてお互いのアメリカ理解そして読者のそれを深めていく工夫が見事に功を奏したとみている。

届けようとする意気込みをも評価して、特別賞にふさわしい本であると審査員たちの意見が一致した。

糖質摂取制限という「革命」を自分一人から起こしていくのは、志次第、何とかなりそうである。地方政治に抜本的な改革をもたらすのは、もっと難しい。そして、日米関係の根本的な見直しはさらに困難な相談である。今年の受賞作は、三冊とも新たな展望を見据えて、思考と行動の変化を呼びかけている。著者らに、高知の一市民として何が出来るか、前向きに考えていくのではないか、という期待を託されたと感じる。

ヨース ジョエル

一九七〇年 ベルギー国ゲント市生まれ。

二〇〇一年、ベルギーにあるルーヴエンカトリック大学で博士号を取得。二〇〇八年より高知在住。

高知県立大学文化学部教授。第三十四回高知出版学術賞審査委員長。専門は日本文化論、日本思想史。

能楽との出会い

金 奎道

二〇一七年四月、高知大学教育学部に赴任してからはや九年が経った。大学では、教員養成課程における初等音楽科指導法や中等音楽科指導法などの科目を担当し、音楽に関わる教育や指導の在り方について研究を邁進している。現在の小中学校音楽科においては、西洋音楽だけでなく日本伝統音楽や世界の諸民族の音楽など多様な音楽が取り入れられているため、将来、教員を目指す学生たちには、こうした音楽に対する深い理解が求められている。特に筆者は、日本伝統音楽や世界の諸民族の音楽についての教材の可能性を探るべく、教育や研究での幅広い活用を模索している。

ただ、長年学校音楽に携わってきた自分さえ、日本伝統音楽の魅力を知るまでには、かなりの時

間を要した。その理由は、慣れ親しんでいる西洋音楽との比較に拘り過ぎて、その音楽のもつ本来の良さに気付くことが困難であったことにあると内省できる。そんななか日本伝統音楽の魅力に気づく契機となったのは、学生時代に芸術大学にて受けた「日本音楽史概説」「東洋音楽史概説」の二つの授業だった。この二つの講義は、雅楽、声明、琵琶楽、能・狂言、箏曲、地歌など、日本音楽の発展と進化の歴史を幅広く学ぶ授業（後者は、東アジア、東南アジア、西アジア、南アジアの広範囲にわたる各々の音楽を音律、旋法体系などの側面から理解する授業）であった。その当時、私は、西洋音楽中心に勉強していたこともあり、これらの授業は自分にとって大変新鮮なものであった。

ソクラテスの格言に「唯一の真の英知とは、自分が無知であることを知ることにある。」という言葉がある。自分に当てはまる節であると感じたのか、この時から、大学の副科授業で雅楽とインドネシアのバリガムランを学び、授業外では個人的に尺八演奏家から無料レッスン（知人の紹介で宗家から学んだが、苦学生であることが憐れみを誘ったかも）を受ける日々を送った。「銭無き男は帆の無き舟の如し」というが、こうした質の高い学びは、経済的困窮による苦学生の生活の中、貴重な経験や視野の拡大、そして精神的な豊かさをもたらした。

また、当時住んでいた賃貸アパートは、国立劇場のある永田町まで電車一本で行けることもあって、ほぼ毎週のように通いながら日本伝統芸能を満喫した。高額なチケットを購入できるほど余裕があるわけではなかったのですが、キャンパスメンバーズという制度を活用し、半額以下で一流の演奏を鑑賞することができた。昼の部の公演がある時は、劇場のロビーでおにぎり

を立ち食いしながら開演をまつことも多々あった。老夫婦が仲良くお茶付きの特製弁当を食べる姿を見て、いつかは自分もやってみて、いつか自分もやってみて、と思ったこともある。

当時の自分は知的好奇心も高かったこともあり、自己研鑽に積極的に励み、勉強の一環としてジャンルを問わず幅広く鑑賞したが、その中でも、国立能楽堂で観た能公演が、他の伝統芸能に比べていちばん難しかったことを覚えている。たとえば、何らかの理由で公演中にも関わらず何度も眠りに落ちたり、時代背景や言葉を理解するため（舞台を観ず）タブレットに夢中になったり、また、何度観ても内容が難しくて分からない、いわゆる学びのハードルがあった。こうした理由で自分のなかで理解が及ばなかった能楽だったが、今となつては一番身近な存在となっている。

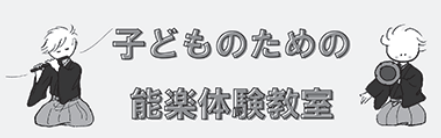
二〇一七年高知大学の赴任当初、地域に根ざしている伝統芸能団体を探し回り、結局、ネットから得た情報をもとに高知県能楽協会と連絡をとった。後日、当時の協会

事務局長と常任理事の二人が大学の研究室へ訪問してくださり、そこで雑談を交わしながら能楽についてのご縁が契機となり、音楽教員志望学生に能楽の良さと面白さを教える外部講師を派遣していただいたり、附属学校の児童生徒を対象とした出前授業では能楽の楽器（笛・小鼓・大鼓・太鼓）が体験できるよう協力していただいたりした。

現在、県能楽協会には十くらいの社中があり、筆者は長浜病院の

杏聲園という能舞台を拠点に活動している「囃子友の会」に所属し、月一回の稽古にて笛（能管）を担当している。当社中には、職業的専門家である能楽師は不在だが、「能楽経験の豊富な人が経験年数の浅い人を教える」といった環境の下、能楽を楽しんでいる。

二〇二四年度以降は、筆者の呼びかけで、県能楽協会と連携して、国立青少年教育振興機構の助成金を受けた「子どものための能楽体験教室」の企画・運営をおこなっている。この活動は、高知大学教



子どものための 能楽体験教室

日本の伝統芸能である能楽の「謡」・「囃子（小鼓）」・「仕舞」を体験してみよう！

日程	場所
第1回 9月7日（土）	高知大学 朝倉キャンパス 教育学部音楽棟
第2回 10月5日（土）	
第3回 11月2日（土）	
第4回 12月7日（土）	高知能楽堂 （高知県立美術館ホール）
第5回 1月11日（土）	

活動時間 10:00～12:00（受付開始 9:30）

参加を希望する部を記入していただき、複数参加・連続参加も可です。
各回とも謡、能管、囃子（小鼓）の3つを体験できます。
ただし、第5回目は第1～4回の体験の復習になります。
※動きやすい服装でお越しください。

主な指導者紹介

金 奎道
高知大学教育学部准教授
高知能楽協会顧問

高橋 精二
高知能楽協会専務理事

大場 隆史
高知能楽協会事務局長

植村 永子
高知能楽協会庶務理事

対象 小学1～6年生（定員：各回30名）

参加費 無料

↓ 申込は下のQRコードから！ ↓



この活動では、子どもたちの安全への観念のために写真撮影を行います。
顔文字や個人情報（写真）は、「（株）国立青少年教育振興機構」が
提供する個人情報の適切な管理に関する規程）に基づき、
子どもたちの安全確保を目的にのみ利用されます。

↓ 高知大学朝倉キャンパスまで ↓



主催：高知能楽協会 後援：高知市教育委員会
協賛：国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金助成活動」

育学部音楽棟や高知県立美術館能楽堂を利用しておこなう小学生向けの体験活動である。子どもたちが、実演家の指導のもと、能の声楽部分である謡、扇を持って舞う仕舞、そして囃子（小鼓）を順番に体験するプログラムを開発し、実践を試みた。二〇二四年度は、高知市にて募集をかけ、五日間で五十九名の小学生が参加した。そして、二〇二五年度からは高知市から高知県へと募集範囲を地理的に拡大させ、より多くの子どもたちの参加を呼び掛ける予定である。

数年前、「歌舞伎や能楽、文楽など伝統芸能の世界を志す若者が減っている」という新聞記事を読んだことがある。とくに、地方における日本伝統音楽の若者離れは一層深刻化しており、県能楽協会構成員の年齢層をみても、七十、八十代の方が大半を占めている状況である。こうした伝統芸能の若者離れ問題については、実際の生活と伝統芸能の世界がかけ離れていることや教育現場において十分な検討がなされていないことが、具体的な要因として挙げられるだ

きむ ぎゅど

一九七六年 韓国京畿道生まれ
高知大学教育学部・総合人間自然科学研究科（修士課程）スポーツ・芸術文化創専攻准教授



ろう。そのような課題を、私は、地域との連携及び協働により、子どもたちが楽しみながら能楽に触れられる学びの場を構築することで、今を生きている子どもたちとの接点を見出し、能楽を好きになってもらう方法を考えていきたい。

フランスの作家ジョセフ・ジュベールは、「教えることは二度学ぶことである」と言った。今は教える仕事についているが、児童生徒から学ぶことも大きい。今年度は、昨年度より参加者が増加して更に充実した「子どものための能楽体験教室」となることを心より願う。

私も鳥の言葉がわかりたい

山中 由貴

山を歩いているとき、疲れを癒

してくれるのは鳥の声だ。通りすぎる藪の中から、空高い木の枝から、澄んだ鳴き声が聞こえると、うれしくなってへたくそな口笛で会話を試みる。無知なのでなんの種類かはわからないのだけど、ときに長く囀りながら鳴きかたを変化させる鳥がいて、なにをしゃべっているのかなあ、と興味を覚えることがある。

そんな私の好奇心をいっぱいに満たして、さらにたくさんの驚きと感動をくれた本と出会った！とにかく面白くて画期的で、わくわくが止まらないのだ！

それが、鈴木俊貴さんの『僕には鳥の言葉がわかる』（小学館）

という本だ。

鈴木俊貴さんは東京大学准教授。「動物言語学」という新しい学問のジャンルを立ち上げた。愛犬の名はくーちゃん。今もつとも注目される鳥の研究者だ。

小さいころから虫やカエルなどの生物に触れ、観察することが好きだった鈴木さんは、高校生になって双眼鏡を買ったのをきっかけに、バードウォッチングにはまっていくな。そのまま鳥の研究ができる大学に進学し、鳥を観察することが仕事で趣味、という毎日を謳歌しているのが、いち読者としてもほほえましい。

あるとき、シジユウカラやコガラ、ヤマガラなどのカラ類、コゲ

ラやアオゲラなどのキツツキ類が混ざって群れをなす「混群」が、登山者によるヒマワリの種のプレゼントを見つけて騒いでいるところに出くわした鈴木さんは、コガラ「デーディー」という鳴き声が、群れの他の鳥を呼び寄せていることに気づいた。しかし奇妙だ。なぜ餌を独り占めしないのだろうか？不思議に思っ

て観察をつづけていると、「ヒヒヒ」と鋭い鳴き声

の聲が、仲間たちに天敵の襲来を知らせたのでは？襲われないように、群れを呼んで見張りをしながら餌を食べているのでは？つまり、混群の仲間どうし、鳴き声で情報を伝えあっているのかもしれない！

そういえば、シジユウカラたちはじつにさまざまな鳴き声をつかい分けているようだ。

世界ではまだ誰も気づいていないけれど、鳥たちには鳥たちの言葉があるのかもしれない。そうなれば大発見だ。

そうして、鈴木さんの鳥語解明の研究がはじまった。

そんな鳥の研究者、鈴木俊貴さんの研究に没頭する日々と、鳥語が存在することを一体どんな方法で証明したか。それを面白おかしく書いたのがこのエッセイだ。

鳥の観察に入れ込むあまり食事を忘れてガリガリに痩せてしまつて、差し入れでもらったひと玉のキャベツをありえない方法で食べる話とか、最強の巣箱を完成させるくだりとか、実家の両親のシジ

ユウカラのお世話係としての仕事ぶりとか、とにかく小学生男子のままのような鈴木さんのおもしろエピソードが楽しい。

また、研究や観察のしかた、鳥の言葉を突き止めていく過程も抜群にドラマチックで読み応えがある。鳥たちの天敵がハイタカかへ



ビカで、鳴き声（言葉）が違うことを発見したあたりは、驚くことばかりで唖ってしまった。意外なヒントから証明方法を思いついたり、論文が認められてサイエンス誌に掲載されるまでのどきどき感だったり、研究者がどんなふう在活动中しているのかわかりやすく書かれているのもよい。

学者の書いた本なら専門的な用語もあつて難しいかも……、なんて心配はいらない。テレビの出演もあり、知っている方もいると思うけれど、鈴木さんの親しみやすいキャラクターもそのままの、驚くべき読みやすさだ。これなら中高生、いや、興味があれば小学生の高学年だってぐいぐい読めるはずだ。学びはじめたばかりの学生たちにはいっそう強くおすすめしたい。だって、自分が興味を持った物事に夢中になること、なにかを調べたり探究するにはどんなアプローチをすればいいか、知ること、知ろうとするこの楽しさが、この本には



ぎゅっと詰まっているんだから。いやそれ以前に、ただ単純に、鳥をずっと観ているのがこの人は好きなんだ。鳥がかわいくてしかたないんだ。それが伝わってくるだけで、この本は大正解。終始うきうきした気分が文章の端々に溢れている。

もう、鳥への愛がただ洩れだ。

私がよくいく鷺尾山や烏帽子山で会うのはヤマガラだ。黒い頭にオレンジの体がかわいい。

そこには鳥の餌場があつて、木の枝に設置されたざるにヒマワリ

の種を差し入れることができる。餌場のそばで手のひらに餌を載せてしばらく待つと、人慣れたヤマガラが種をついばみにきてくれる。手をヤマガラのお脚にくつと掴まれたかと思うと、一瞬のうちに餌を持ち去っていく。そのほかない鳥の重みをやみつきになって、ついまたヒマワリの種を持って山に登りにいってしまう。

鳥たちはきつと、餌を持った人間がきたら会話しているのだろう。それがシジュウカラならこうだ。

「ピーツピ・ヂヂヂ！（警戒して、集まれ）」

やまなか ゆき

一九八〇年 高知市生まれ。

TSUTAYA中万々店の書店員なかましんぶん編集長としてXやっています。

好きな本について喋るときだけ饒舌になります。

「タウンモビリティステーション ふくねこ」開所十周年を迎えて

笹岡 和泉

「二十年前ぶりに街へ来れた！こじやんと嬉しかった！」若い頃は街へよく出掛けて来ていたけれど、障害を発症してからは出掛けることを諦めていた。そんな時に高知の中心商店街でタウンモビリティという取組みがあることを知って、新聞記事の切り抜きを握りしめて来られた高齢の女性は、朝から本屋に行き、カフェでランチをし、中央公園でのイベントに参加し、久しぶりに買い物をして一日楽しんで帰られた。そんな笑顔が、私たちの原動力になっている。

タウンモビリティとは、高齢になっても、重い障害があっても、誰もが出掛けたい場所に出掛けられる『移動の権利は保証されるべき』という考え方。先進地の久留米市から惜しみないご協力を頂き、高知でも二〇一一年から試験実施を重ね、その効果を行政にも認めて頂けるようになり、現在の京町商店街に拠点を開設出来たのが二〇一五年。

高知の中心商店街では長距離移動が困難で、外出を諦めていた方々に出掛けて来てもらいたいとの思いから、タウンモビリティでは車椅子、

シルバーカー、ベビーカー等の貸出しや、車椅子を押したり視覚障害者の手引きをする付添いボランティアの利用も行っている。

また、その場に出掛けなくなる魅力も作りたいと、童謡教室・手話カフェ・まちのコミュニケーション・若年性認知症カフェ・いたわり住宅相談等のイベントも行っている。そこでは障害の有無も老若男女も関係なく、楽しい会話や笑顔の交流がある。障害当事者が経験を語ることでボランティアや学生の学びになったり、お互いのできることで助け合ったり、違う障害の方同士、ボランティア同士の出会いからもまた学びがある。高齢者・障害者はサポートを受ける側だけではなく、支援者となり誰かの役に立つ存在であり、社会資源なのだということを証明する場にもなっている。

多くの人は、



誰かに必要とされる時に自分の存在意義や喜びを感じ、前向きな気持ちになる。それが次の行動の意欲にも繋がっていく。そんな方々の姿にたくさん出会ってきた。外出支援から生きがい支援へ、この場所が共生社会の実現の場にもなっている。それはこの場所に集まる皆がアイディアを出し合い育ててきてくれたからだ。と、出会えたすべての方々いつも心から感謝している。

また、高齢者・障害者・赤ちゃん連れの方が街へ多く出掛けてくるようになると街なかの段差や不便さのバリアにも気付く。それを改善していくことで街のバリアフリー化も進む、さらに誰もが出掛けやすい街になる。中心商店街に出掛けてくる方が増えれば、街で買い物や食事をする方も増える。

それを評価して頂いて、高知市中心市街地活性化基本計画の中にタウンモビリティ事業も盛り込んでくださったっており、第一期計画では「来街者に優しいまちづくり」、第二期計画では「経済活力向上」のための事業と位置付けて頂いている。

しかし、活動は順調だったかと言えば、コロナ禍では利用の休止や参加者ゼロの時期も続き、思いを共有している仲間と工夫や対策を考えながら、現在まで活動を続けることができています。ようやく二年前くらいから徐々に利用者が戻って来て、またクルーズ船観光客も増え、街にも

活気が戻ってきている。

四月二十九日に十周年の節目を迎え、五月からは週四日の運営から水曜以外の週六日に増え、イベントの開催や車椅子等の貸出し対応もより充実していくこととなった。

また新たな気持ちでこの活動を必要としている方に一人でも多く届くように、誰もが訪れやすい場所になるよう努めていきたいと思う。ぜひ一度、お気軽にお立ち寄りください。

NPO法人福祉住環境ネットワーク
こうち ホームページ



ささおか いずみ

一九七一年 高知市生まれ

NPO法人福祉住環境ネットワーク

こうち 理事長

NPOでは誰もが暮らしやすい、出掛けやすい、訪れやすい高知の実現のために、「住宅改造アドバイザー」「タウンモビリティステーションふくねこ」「高知県バリアフリー観光相談窓口」の運営に取り組んでいる。



「アンテナ」 「劇団どくんご」と バイクツーリング



下尾 仁

文化高知No.205で書いた「劇団どくんご」。主宰者・どいの氏が天国に旅立ったため、二〇二四年のツアーを最後に残念ながら解散となったが、このツアーでもありがたいことに高知に来てくれた。僕はいつも公演の幕間に出演させてもらっており、今回もちろん出演した。

彼らのツアーは、本拠地・鹿児島を出発し、北上・南下しながら各地で公演を行い鹿児島へ戻る。高知公演は南下途中、ツアー終盤での開催が常であった。しかし今回はツアー開始直後、五月の開催。二日間の公演は満席で、熱量、演出、一人ひとりの演者が輝きを放ち、今回も素晴らしい舞台であった。僕も幕間の手ごたえを感じ、ラストツアーに花を添えられたのではないかと思う（自画自賛）。これが最後かと思うと寂しい思いがこみ上げたが、ツアーはまだ始まったばかり。ツアーの成功を願い握手を交わした。

山公演に行こうと思い立った。鯉でいえば高知公演は初鯉。ツアー終盤の岡山公演は脂ののりきった戻り鯉。数々の公演を経てどんなふうに変化しているか。しかもよく考えると毎回幕間に出演していたので自分の準備で忙しく公演全編をゆっくり観たことがない。最後は客席から堪能し見届けねば。知人らが車で乗り合わせて行こうと誘ってくれたが、終演後の打ち上げに参加したい僕は、一人で一〇ccのカブで行くことに。若い頃は長距離ツーリングが好きで北海道も一周するくらいであったが、ここ何十年していなかったの、それも楽しみであった。

当日、早朝に出発。下道で三時間半ほどをかけて高松港に到着。フェリーで直島に向かい、岡山行きのフェリーに乗り換える。そこからさらに約一時間で会場に到着。会場は超満員で熱気を帯びていた。「劇団どくんご」、やっぱりすごかった。高知で観たときも良かったが、集中し

て観たせいか言葉の一つひとつが心に刺さる。演者のパワーに圧倒され、あつという間に公演は終了した。まだ熱の残った会場（テント）で打ち上げ開始。各々が感想を述べたり写真撮ったり。僕もほろ酔いで今までの感謝の気持ちを伝えることができた。

打ち上げの後、まだほのかに熱の残るテントに泊まらせてもらった。早朝、まだ寝ている皆を起こさないよう走り書きの手紙を残して岡山を後にした。

久々の長距離ツーリングで僕のバイク熱に火がついた。さっそく次の休日、早明浦ダムから大川村、本川村をいの町に抜けて帰るルートでツーリングに出発。が、本川村のトンネル内で急にバイクがブスブスと音を立てて止まった。とりあえずバイクを手で押してトンネルの外へ。エンジンオイルを確かめようとキャップを外すと煙が立ち上がり、エンジンは焼き付いていてどうにもならない。さあどうしたものか。吾北に住む友人にSOSを送ると軽トラで迎えに来てくれ、使っていないバイクまで貸してくれた。バイクに詳しい別の友人に「エンジンが…」と相談すると、中古のエンジンを買い載せ換えてみてはと、格安で購入し修理もしてくれ、僕のバイクは無事復活。持つべきものは友である。



公演の熱気が残るテントに宿泊
(筆者は上から二人目)

しもお ひとし
一九六九年生まれ。
岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

今もちよこちよこ乗ってはいるが長距離は…とビビっている。岡山に行った時に故障が起これなくてほんとよかった。

話はそれだが「劇団どくんご」は二〇二六年「劇団夏型天使」と名を変えて活動する。ならば解散しなくてもいいのではという声もあるが、団員としては「劇団どくんご」は主宰・どいの氏あつてのものという考えだという。

さあ、「どくんご」から「夏型天使」にバトンが託された。まだテント芝居を観たことがない方々、「夏型天使」を目撃せよ。そしてエンジンオイルはこまめにチェックしましょうね。

3月の事業から

かるぽーとぐんぐん音楽会

【今回の事業報告は、来場した小学生目線で書きました】

私は、お父さんとお母さんと妹の四人で、かるぽーと四国銀行ホールで開催された「かるぽーとぐんぐん音楽会」に行ってきました。

かるぽーと一階のホール入口では、入場を待つ人でけっこうな行列ができていました。入場口で、スタッフの方にチケットを渡し、会場に入ると、目の前に色とりどりの風船や電飾されたポスターが現れました。これはインスタ映えすると思い、お父さんに写真を撮ってもらいました。かわいらしく華やかな印象のロビーには、大きい恐竜（着ぐるみ）とフクちゃん（着ぐるみ）がお出迎えしています。手にマラカスを持ってリズムをとっていた恐竜は、その風貌とのギャップが面白かったです。フクちゃんは、手を振ったり、握手をしたり、多くの子ども達が集まっていました。一緒に写真を撮っている人もけっこういました。ロビーの奥には、ジョイントマットが敷いてあって、小さな赤ちゃんがよちよちしています。赤ちゃんが乗って来たベビーカーは、お母さんがスタッフの方に預けていました。授乳室を利用している人もいて、サービ

スが充実しているなと思いました。

客席に着く前に、妹のチャイルドクッションを借りました。小さい子どもは大人が前に座るとステージが見えなかったりするけど、チャイルドクッションに座るとちゃんと見えるので嬉しいです。最前列には、本来あるはずの座席がなく、畳が敷いてありました。小さい子ども達が、自由にリズムをとったり踊ったりしていて、一緒にいるお父さんお母さんも楽しそうでした。

ステージ上には多くの楽器が並べられていて大勢の演奏者によって、『アンパンマンのマーチ』や『ドラえもん』など聞いたことのある曲がたくさん演奏されました。指揮者に挑戦するコーナーは、やりたくて手をあげたけど、当てられなくて残念。いつか機会があれば挑戦してみたいな。最後の方で、合唱の方もステージに出て来て、会場みんなで大合唱。『ピリブ』では、暗闇で光るサイリウムをみんなで光らせました。満席の会場で色とりどりに光るサイリウムは幻想的でした。アンコールでは、恐竜とフクちゃんもステージに登場し、最後のさいごにキラキラテープがバーンとステージの横から発射されました。テレビでは見たことあったけど、初めて生で見てビックリしました。目の前に落ちてきたので、記念



に取って持つて帰りました。これでコンサートは終了かと思えば、客席を出ると、さっきまでステージにいた出演者の方々による楽器体験コーナーが始まっています。さっきまで演奏していたのに、すごいなあと思いました。私は、トロンボーンとアゴゴベルを体験しました。ちょっと変わった音がして、普段触ったことのない楽器に触れられて嬉しかったです。今日は、私が想像した以上に音楽を楽しめました。妹や両親も楽しかったみたいで、また行きたいねと話しながら帰りました。

開催日 三月二日（日）
会場 かるぽーと 四国銀行ホール
入場者数 九〇〇名

高知市文化振興事業団

新・祝祭音楽劇 「小さな星の王子さま」

共生社会の実現に向けて、多様な人たちの創作を通じ、劇場と地域を結ぶことを目的に『新・祝祭音楽劇「小さな星の王子さま」』を上演しました。

本作の初演は二〇二一年。再演となる今回は、戯曲を改めようと劇団いちびり一家の阪上洋光さんが書き下ろしました。出演者とサポートスタッフは一般から広く募集。応募のあった方々との面談を経て、出演者二十五名、サポートスタッフ十名とともに舞台を作り上げていくことになりました。

十月から稽古がスタート。参加者たちが楽しみにしていた台本を開くと、そこにはセリフを発する人が指定されておらず、通し番号のみが表記されていました。突然歌謡曲を歌いだす登場人物たち、そして本物の王子さまは登場しない。自分たちが知っている「星の王子さま」とはまるで違うストーリーに、はじめは戸惑っている様子でした。しかし、稽古を続けるなかで台本の意図を理解し、また参加者同士の関係性においても他者の得手不得手を認め、補い合える良い雰囲気

の稽古となりました。そして参加者の誰一人欠けることなく全員で迎えた本番当日。積み重ねてきた稽古の時間を信じ堂々と観客に挑む出演者らの姿が舞台にありました。



参加者の中には視覚や聴覚など身体に障害のある方や心の調子を崩している方などいます。お互いにコミュニケーションを図るため、例えば、手話が得意な人だけが聴覚障害の方と関わるのではなく、他の人もつたない手話や音声を文字化するアプリを使い、なんとか意思の疎通をはかろうとします。そんな姿を見て、この事業が目標とする「舞台芸術創造事業による共生社会の実現」とはこのようなことを言うのかもしれないと感じました。

公演では字幕タブレットと音声ガイドの支援サービスを実施し十四名の方が利用しました。また、初めての試みとして開演前に十分程度「舞台説明」の時間を設け、舞台美術の説明や舞台上の声の聞こえ方の確認などを行いました。来場者からは「こんなことが必要な情報になるのかと知ることができた」「自分も目をつぶって聞いてみた」「他の公演でもあって良いと思う」など取り組みに関して共感の声を多くいただきました。

開催日 三月九日（日）
会場 かるぽーと 四国銀行ホール
入場者数 六六〇名



高知を撮る

第30回写真コンテスト入賞作品

「豊作祈願」

(平成21年6月7日 越知町)

安藤 キヌ子

教育現場が「ブラック化」したと言われている。文科省が令和四年度に実施した調査によると、国が上限としている月四十五時間を超えて残業している教員は、小学校で六四・五%、中学校で七七・一%に上る(読売新聞オンライン)。―教員志望者が激減するはすである。

また、令和四年四月時点での教員不足の割合が、小学校では二〇・三%、中学校では二四・四%に上ったとのこと(同)。教育現場は危機的状況にある。

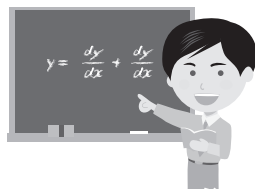
そこで思い出すのが、『甚田先生はただ日記』(田内瑞穂)という名著だ。かつて土佐中学高等学校で国語の教鞭をとっておられた田内瑞穂先生が、昭和五十九年に出版された随筆集だ(四国写植出版制作室発行)。教員時代の楽しい思い出が絶妙の筆致でつづられている。

最近、久しぶりに読み返し、あるエピソードに衝撃を受けた。

当時―昭和三十年から四十年にかけて―吸江橋(今の青柳橋?)のたもとでエバという魚がよく釣れたらしい。

その日、数学のY先生は、朝の補習の授業が七時からあったが「一箇に合いさえすれば良からうが」と夜明けとともに橋へ駆けつけた。六時

教育現場



風俗歳時記

のではないだろうか。

去年、高知県の教員試験で、合格者二百八十名中二百四名が辞退した、と聞く。現場の魅力が枯渇しているのではないか。教員が忌避する教室で心豊かな子どもが育つだろうか。甚田先生のゆとりの世界を、無理を承知で、もう一度呼び戻したい。

(本の虫)

半頃、補習に間に合うようにと釣り道具をしまつて帰ろうとしたそのとき、体がすべって近くにいた三十五才ほどの男性に当たった。『三十五才氏』はとっさに飛び上がり、直下にあったテトラポットを避けつつ海中へ飛び込んだ。Y先生は突堤の上からひらあやまりにあやまって許してもらった。

まるで異世界の物語である。授業があるのに、早朝釣りに行く―しかも朝補習を控えているのに。…朝、釣りに行く―という発想そのものが、今の教育現場にはないだろう。もちろん、今そんな教員がいれば、大問題になるだろう。しかし、『甚田先生はただ日記』の世界は、のどかである。そのまぎれもない余裕が教育現場に豊かさを生み出していた

第77回高知市展子どもアートまつり

じぶんのおもうまに
かいて・つくって・たのしもう！

あなたグビンチ ぼくピカリ

令和7年6月1日にちようび
午後1時から午後4時
雨天決行！

会場
高知市文化プラザかるぽーと北広場
高知市立中央公民館

フリーパスポート500円
かるぽーと北広場にて12時45分から販売

© 2023 Kart Productions - France
3 Cinema - Marvelous Productions
- Umeda

ベルナデット

最強のファーストレディ

第206回
市民映画会

6月28日(金)

高知市文化プラザかるぽーと 四国銀行ホール

上映時間	ベルナデット 最強のファーストレディ
	①12:10 ②16:00 ③19:45
	灯火(ネオン)は消えず ①14:00 ②17:50

【入場料】一枚のチケットで両方の作品をご鑑賞いただけます。
一般：前売券1,300円、当日券1,600円
割引：1,000円(映画会当日に会場で販売)
※学生証、長寿手帳、障害者手帳等をお持ちの方は割引！
【お問い合わせ】高知市文化振興事業団 088-883-5071

灯火は消えず

©A Light Never Goes Out Limited. All Rights Reserved.

風伯

落陽図書館

ライブラリー。落陽図書館って何。赤点学生が最後に行く所か。昭和古色のバー、奥に急階段。こどもころのボロ家そっくり。え、二階に上がるの。私は懐かしすぎる自分の旧家にいる。手狭さがその幻想を強くする。高知には古いモノが残るという。高知城、高知文学学校、そしてこの落陽図書館。店名の由来は二十年ほど前英語教室

「あなたはどなた。怪訝な顔つきの運営委員。文学学校の忘年会、万年幽霊学生の私。「二次会へ行きますか」の社交辞令に、臆面もなくOKする。高知会館からぞろぞろ夜歩き。長年高知におるのに、帯屋町から見知らぬ路地に入る。あれ、ここはどこ。暗い小道、曲がって、振り返って。もう戻れないような。店名はザ・サンセット。

の若い女先生が初代オーナーで、サマセット・モームの小説から命名したとのふれこみ。でもネットのA先生に聞いても、そんな小説ないと。奇妙な部屋。壁に土佐の偉人の肖像が並び、あちこち学術的資料。ここは何なの。女店長から秘話を聞き驚く。歴史等学術討論剛の者が、月一回午後六時半に集結。その名もシャベールの会。なんと会長は敬愛する歴史家だった。豪傑集う梁山泊みたいな昔年の夜学会が高知に残っていたなんて耳を疑う。

社交辞令のお誘いすらないのに、参加を女店長に懇願。本当に参集電話がきた。大作家でも創作し得ないような、特異なキャラを持った登場人物十数人が史談を肴に酒宴を張っていた。私も夢見心地で熱弁する。これは幽霊どもの前で悦に入る私の幻想ではないのかいや、ここは人生のフィナーレにたどり着く、素敵な落陽の図書館。

(昌)

今号の表紙

こどもの日

土居 湖白

こどもの日をたくさん詰め込みました。

(どい) こはく／
龍馬デザイン・ビューティ専門学校2年生)

第77回高知市文化祭



高知市展
アンデパンダン

絵画(洋画)/日本画/書道/先端美術(立体)/彫刻/陶芸/工芸/写真/ペン字/デザイン/北見市美術交流作品

会期 2025年5月24日[土] ▶ 6月8日[日]
午前9時 ▶ 午後6時(月曜休館) 初日 午前10時開場 最終日 午後4時終了
会場 高知市文化プラザかるぽーと
7階BILBOギャラリー

入場料: 前売 300円 [当日 400円] ■ 療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・身体障害者手帳の各所持者
とその介助者1名、及び65歳以上と高校生以下は無料

作品搬入 日時 ▶ 5月18日[日]・19日[月] 午前10時～午後5時 場所 ▶ 7階BILBOギャラリー 出品料 1部門につき一般 1,500円/学生 1,000円

■ お問い合わせ: 公益財団法人高知市文化振興事業団 088-883-5071 ■ 主催: 高知市展代表委員会・公益財団法人高知市文化振興事業団・高知市
■ 共催: 高知新聞社・NHK高知放送局・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・KSSさんさんテレビ

デザイン▶山崎豪志